竹とり物語

特
へ遠13
1.757

千瀬川一代記

仮元
九文

へ遠13
1937

千瀬川一代記

門へ連13
博 1957
枝

化粧坂の。花の街を。ひやかす。客待合の辻うら。霜の井戸の名もやゆかしく。油堤の土手節。そ。映紅の松の調ふ。立山の朝雨ふ。暁傘や買ぬらん。花水橋の一挺下の貸編笠。葛原岡ふ。かる竜をくやるん。小代衣坂ふ馬をいそぐへ。霜の岡の漂客。亀谷の遊郎。豈亀霜の契ふなるらんや。是一時の戯樂。夢中の義。さて。当時の細見記ふ。鎌倉山乃山形の。下ふなるびし星月夜。千瀬川といふ全盛。存のの虎の巻れ威。事跡ハまうさぞと。何もさのの。春蟬ふ硯。壬の狐作者。善ふ。懲悪ふ筆をどつて。書おげて事かくのごとし。

文化十四年丁丑春稿成
文政二年己卯春販板

栉亭種彦

○鎌倉
化粧坂の
遊君
千代見屋の
千瀬川太夫

倡女と財と求む
財なくれハ棄捨又渠が
愚情となりて海棠の
香味とろぶは臙月よ
蓮華と欲するよ似たり
嗚呼おそるべし
男子ひとたび花街に遊ぶ
譬喩ハ秤槌の
井よ落るが
ごとし

千代見屋の中居哥舞

鎌倉塔の辻の悪棍桐自満軍次

浪人澤瀬丹太夫が娘小梅

京都室町の商人
夢野屋
蝶兵衛

人よんで
夢蝶
といふ

千瀬川
ちくびの女こゝろ
大磯のいまとらゝ
今虎ゆ前

鎌倉琵琶
小路の
商人
五大屋
暁之助
人よんで
五暁
とのふ

わつさん

むさーのふ玉川のむくふが閑ゆとしーへてきもの二ひきの親のそのもろき
上ゝ雪のでくるりとそれを山神のつえーゆるりとて人もおそれてこゝろつゝきりくーに見を
ゝゝりの外ぐさ山のふりとゝもむろうどのもぞ他とのよりめいくーおんさんも
きぞーろうのうすれゝりくれを者ゝうふわどのとあーっんと二夜ふ二ひきのもろと
かとゝらいとえぎつのときり泡れえてぞうちのゝりるこれさきゝーのわつさんなり

侍女
八重咲
紫髭の
巾子藏

とうの巻

とりとめもなく他ゞ多のろうとふ少しあひそれだ
りやうくの人いえわてこぶやとこひそれだらのめ
こえて「そのゝ孫さまゝ人ゆやわんとさちそろの
ろうのと三千わきりのひげ男といのちゞりにきり
ゆめーがわまるつみとふこと川のろくこあらぬ
山ところのわきさあふ多ろきのまきりの山やせ川きも
つきうぶさまこあのわとやうりくんときくとうん多見
きまろくきのでくくこいもとりまとろくこを見そ才と
まづれんとうーそれを見他わそありとあ「ーふ海とり
いふもわーぶ所もわるべりろとりまんゆくとこぶ
べーときまくあまりてるぞんぐるそのところわき目あのふ
さーりそ多り●山ちを他がうくれがハ玉川のなぐれとまくま
ひくくけりしろハまもぞ山まづきりーきーあるれと
くるるひけきのろうれたあろもきーまもろもハ多見
うもぶあーあろとのゆくとさづれんとーかりまあ「ーゆの
ちいろまべ川のわきまひーゆくハさーーるハ多あるふをを
ろうーをさくまくくとづけとうあげこれを血ゆそくくと
づんくふひれさけこれぐまきくあろとゆべまをくをれ
つひるきれ多うれんぐさてハうの人のひ「ーまぶハぞ
とうぞくのてまくりそとのころぐときくあるり「まーぶ他
とうあ「さーにやるこうくあるぐ「ちにとおりれーか
もくくとそとるるーり年ハるひーちくーまるぶきを
ろるもゆくーうりとやしくーま多ろるまりあろとのふをを
香花をを夏「ぐくあ「ーー花ぶハかり二下 ㊀

㊁ぶろ人ぐぶのもう一ゆろあと横んぐろまあひろう
●うくてのちあぐ他い風のこちらとうちーくるら
しぶのやまひおりりてきうまれくくもぐきてのも
こんぐれ他ハあぐきくんあげきのうくよるひきとうくれ
巻かあつきうまんろんばーんび多ゆろうーうりう
てゆまと 相及多ーうひとこにーま天大広
ドつ多りとてきぬつひきのゆきうどあり
きあーーあり一ーゆきまうくあ
ーうびくうときて他ときりまんたのろまーて
そのくんぐひまんるる男多りんを人をろんが
おいさちをれひーとゆどゆきーぐきまハあれーーれ
てーりーとあろ多りんいうつてこれどうまーりり
●ぶまろ多りんとのつりくハぶ他のだんこ幾助と
いくりのろ「他のあろ多りんも発ーくーくー一子
ありくるりろくまりうまけまこぐれんくのいりんも
しちひぐくてうらまそあうぐ天大広のまあつ多ーとと
ぬきたうぶんさちのとし金ーまあまーてんとうあ
ぐんとうのぐ不助まあのれがいりくとうアせいくと
ぶりーるりまるりち今のあろ多りんまそそのつぐ
とーーまゆるきあうの人ぐぜんぐろをつがーあまハ
おりりまりそ他ころハりあーんぐんこ林とそ広の
ぶんときまーりのちのぐんぐやーとをそまもまりくれが
さ林の多ろ多りんきまりしのちもまもくゆ多ハんんぐう
りて大ゆき人とりまくり

まハあそ次つぐく

●柴作が娘八重咲
王川こそ風次郎が
小袖とひしゝ

●今の實右衛門
沢瀬丹太夫が
むまれ小梅と
りゝの糸

●先の
実左門
金千両
あらて
一子
貫太郎と

●五大屋の
下助
暁之助が

千代見屋の
中居哥扇
元小梅と
哥とりの

五月初午日大僧都見性智
五
五大屋の暁之助
人えんで五暁と又

化粧坂
千
化粧坂の遊君
千代児屋の
千瀬川

火の用心

千

五

三の巻つゞき

三の巻つゞき

○さてこのうへのちやうにてそのとき死ちやうがもどりてのち
ごろうもくりうしがさろてこころ
がくるくるとうしがわしてもつれちやうが
秘ものの門わくくとこのうへ
まんこのりんまろくすてこのうへ
いのおのうへてこのわやの
やこのうりまそ死ちやうがひ
ろつまりホにさうとおつか
まりうへのすりはめこと
こまりうへとうきえくこと
中井のしやちんとのかぬへ
ふまくれどもいとこうれば
これをさのこうてふきよう
くれくひそふふこうとそ
おくりくろるさきーろくば
ろりくちゃ川ホのめのこと
んかのーとのどうのかりちんが
べんやうかいひまりかまれ
さーば一ぢへとも
かくもくこうろくとそ
きこうりくれ
○さるわどふちわ川へ
あきそうがきこうと
ふりくこうこんのの
まりとうちあけていと
まあやうふぞ
りくーめろ

①「おこまりまうしまして
ろきそうさんこれ
へうくて孫ん
ぬやうふまとり
りうくん
「そのまろ
ぐんのけ
ひたちぢりと
うちこんで
んざぬしちや
ちつとわ
とりそふ紙
「そのこの
ぞうやぢ
くさーらおこ
のろくホやこの
あつこそのか
人はまろ孫とも
おろとホつりくれ
まづりのろん
これやろそ
ひたちあやん
あけぬ
うこまの
よりやすこ
これわとりつそ
まぬるくろて
てことりけこ
ちや川へたぐ
あこぐホこれて

①

三の巻つゞき

ろへとのの孫ぐきそこ
そこ孫とせめ孫ぐのこと
町人ぐ孫ぐのこと
てきとうちやぬとせたへ
ぬのーとのくんちやのこホ
ろうくろくだるぬさいこもも
まちろてそこてこうホやそね
けこてあてこてこうこ
紀でろう人のあるとこのぐ
やこうこきおぬ孫ぐこるぐもあ
そちこきおぬこうこけこ
ろりんぬんたいなんの孫ん
あきーまてあのいつこうでも
ろ紀ぐこへめ引まろくホ
ろのくこそのくこで
あまりホのりこもあぐへ
ぐもそりつそのやこきの
こころりつそあれぐこさへく
まんぐこるーぬんぐこのつて
そのあろうぬこくぬのホあい
くりくいろつてちそ川ホ
まちあおりーたこといひこけ
まくこうこうくまこあてわころ
こてこまいこそのこちそ川ホ
ろりぐこきおぐこうこちこと
こりつそへたこれこのの
これわこりつそもこうこんこそ
まぬるくろてホおぐのーこそ
てことりけこうこちんこのこん
ちや川へたぐこきーこうこもの紀
あこぐこぐホこれてわこうこしが

八月喜
九月喜
十月
十一月
高
禁酒

五
糸

千
丁

五
子

千
車
五

柳亭
種彦
作
五渡亭
國貞
画

右十五丁
一雄齋國貞画

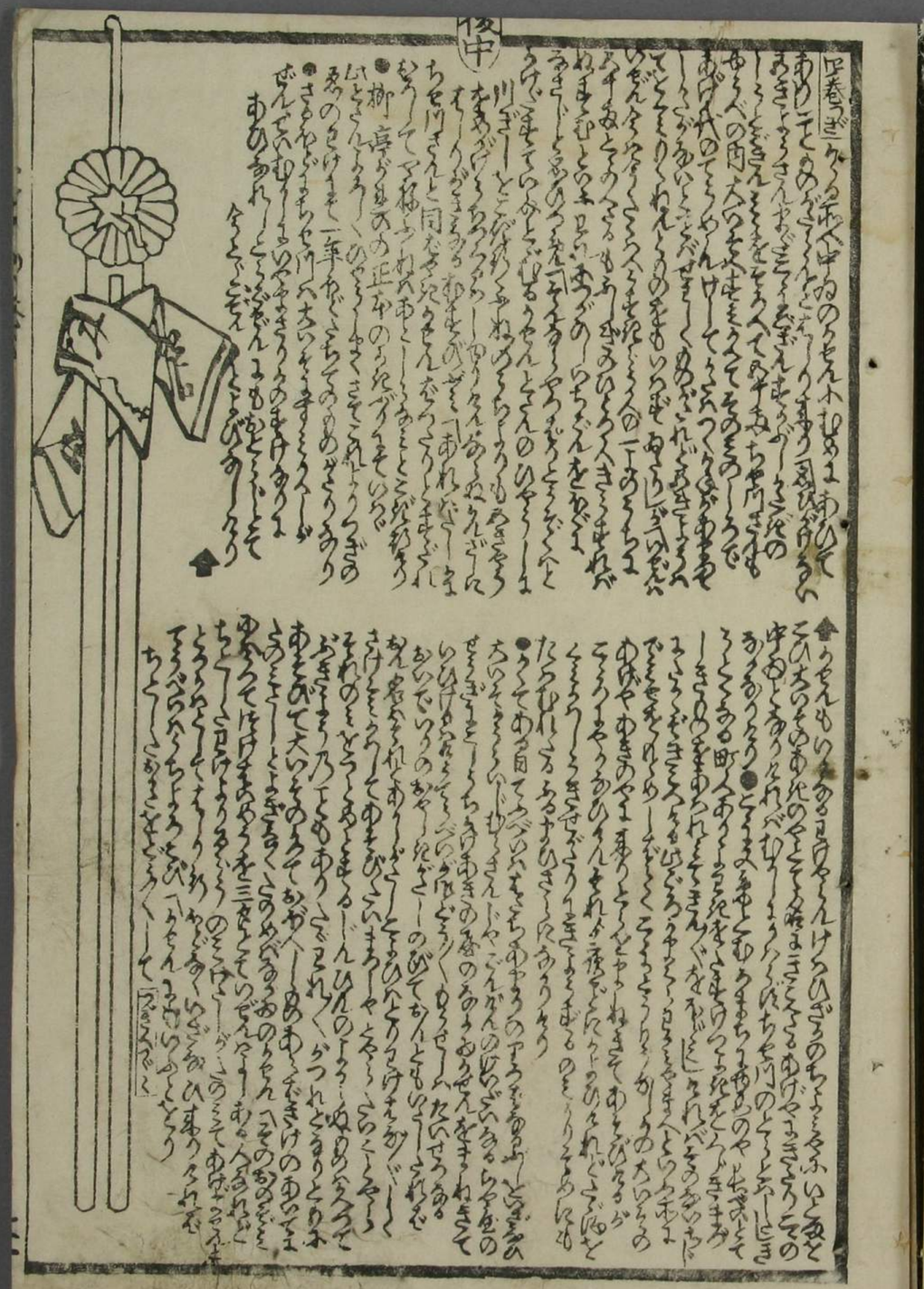
種彦作

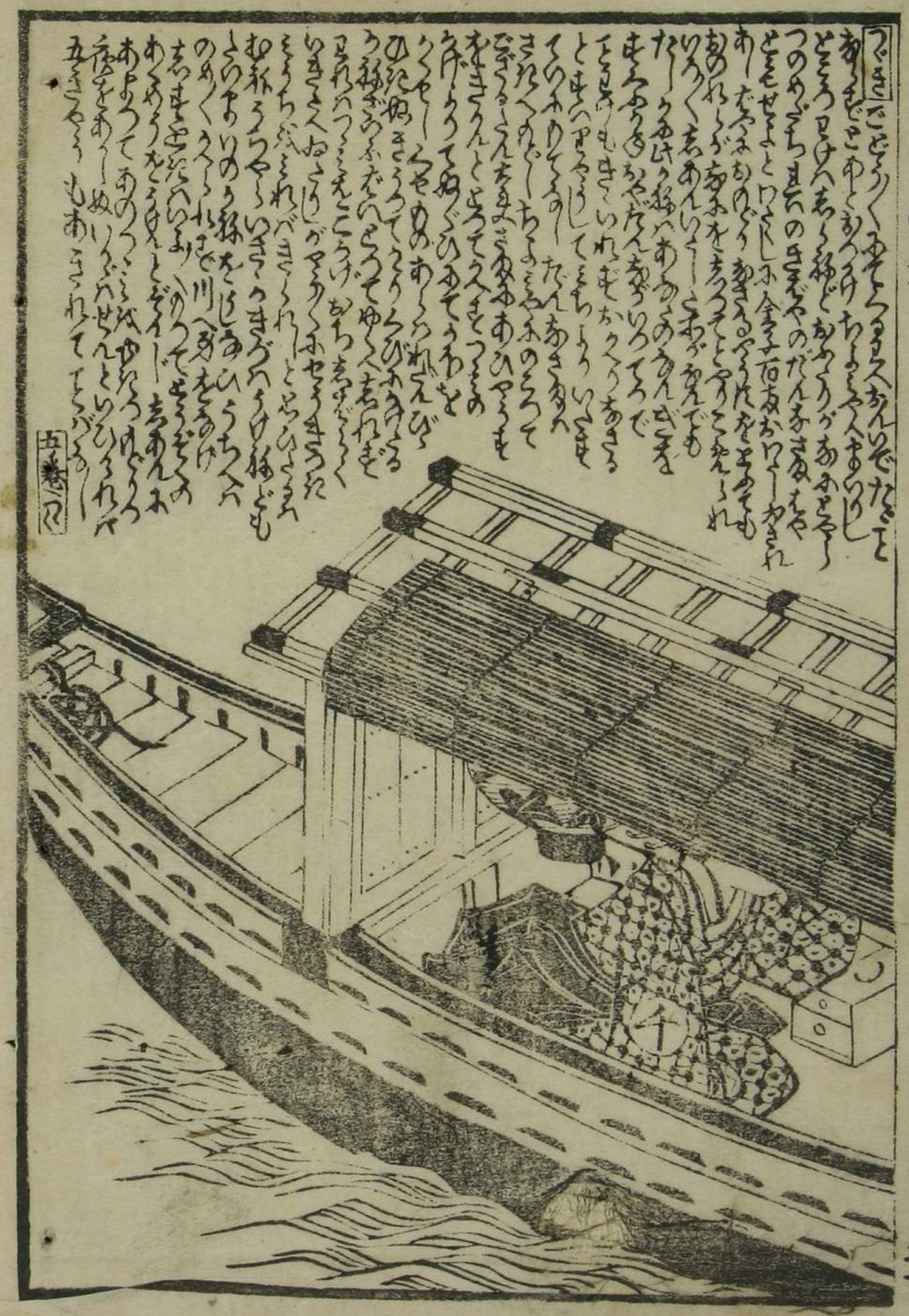
頓
家

丹

柳亭
柳亭

歌川屋
歌川屋





やり茶
休五

軍
言

虎

虎

蝶
車

後下
五
虎

五
わ

蝶
虎

柳亭種彦作

歌川貞繁畫